

Communication / 事例報告

チーム「ニッポン」マルチサポート事業における
フェンシング男子フルーレナショナルチームサポート

Supporting Japan fencing men's foil national team in Team 「NIPPON」 Multi Support Project
for London Olympic Games

星川雅子¹、白井克佳²、松尾彰文¹、千葉洋平¹、岡野憲一¹、河森直紀¹、栗田英行¹、
長坂聡子¹、織田憲嗣¹、宇土昌志¹、安藤憲仁¹、土肥美智子¹、関口愛子¹、紅椋英信¹、
江村宏二³、石井聡^{3,4}

要 旨

チーム「ニッポン」マルチサポート事業は 2008 年度に開始された文部科学省委託事業である。同事業は「アスリート支援」と「研究開発」から成り、独立行政法人日本スポーツ振興センターは「アスリート支援」を受託した。そして 2009 年度にフェンシング男子フルーレナショナルチームがターゲット競技種目に選定されたのを受け、2009 年から 2012 年ロンドンオリンピックまでの期間、フェンシング男子フルーレナショナルチームに対して 7 つの分野から包括的なサポートを実施した。実施されたサポートは、トレーニング指導、フィットネス、医学、栄養、心理サポートを通じた心身のコンディショニングと、映像（試合映像分析）、情報戦略サポートを通じた強豪国対策、ロンドン市内でのオリンピック準備のサポートであった。本サポートの特徴は、複数分野のサポート担当者が連携して男子フルーレチームをサポートしたことであり、それによって、各分野の担当者が独立してサポートを行うよりも、チーム・選手の状態に合ったサポートを行うことができた。本稿では、サポート体制、サポート例、(公社)日本フェンシング協会からのヒアリング結果等について報告する。なお、本稿はフェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポートの全体像を報告するものであり、各分野のサポート内容の詳細は別稿で報告する。

Key words: フェンシング、男子フルーレ、チーム「ニッポン」マルチサポート事業

¹国立スポーツ科学センター、²日本スポーツ振興センター、³(公社)日本フェンシング協会、⁴大分県地域成人病検診センター

〒115-0056 東京都北区西が丘 3-15-1

Tel 03-5963-0229

Fax 03-5963-0231

E-mail masako.hoshikawa@jpnnsport.go.jp

受付日：2013 年 1 月 15 日

受理日：2013 年 6 月 11 日

I. はじめに

独立行政法人日本スポーツ振興センター・国立スポーツ科学センター（以下 JISS）は、2000 年に文部科学省が策定した「スポーツ振興基本計画」で述べられた主要な課題の 1 つである我が国の国際競技力の総合的な向上を、スポーツ医・科学・情報の各側面から支援することを目的として設置された機関であり、2001 年 10 月開所以降、2004 年アテネ、2006 年トリノ、2008 年北京、2010 年バンクーバーの各オリンピックに際し、各種事業を通してトップレベル競技者および競技団体への支援を行ってきた¹⁰⁾。この間、イギリスの「No compromise Investment Strategy」、オーストラリアの「Strategic Plan for the participation of the 2006 Australia Olympic Team」など、オリンピックでのメダル獲得に特化したサポートを国の統一的戦略に基づき実施する潮流が世界で生まれた。このような潮流の中、2008 年に自由民主党政務調査会・スポーツ立国調査会がまとめた報告書『「スポーツ立国」ニッポンを目指して」³⁾の中で、「国家戦略としてのスポーツ」として提案された 3 つの戦略のうちの一つ「競技力の向上に国を挙げて取り組む」の重要施策の一つとして、「メダル獲得が有望なトップアスリートに対し、技術面のみならず、精神面、栄養面、体力面等の総合的観点から競技力向上に取り組む『マルチ・サポート・システム』を強化・充実させる。」と、オリンピックに特化した総合的・包括的な取り組みについて言及された。チーム「ニッポン」マルチサポート事業は、こうした経緯で 2008 年に開始された文部科学省委託事業であった²⁾。この事業の目的は、2012 年ロンドン及び 2014 年開会予定のソチオリンピックで日本が世界の強豪国に競り勝ち、より確実にメダルを獲得するために、トップレベル競技者などのメダル獲得が期待される者に対して、スポーツ医・科学・情報面からの専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に実施することであった。支援の考え方は、「国は、ターゲット競技種目・競技者（チーム）に対して、中長期的な視点も加味しつつ、限

られた資源を集中的・重点的に投下する」というものであった⁹⁾。この事業は「アスリート支援」と「研究開発」から成り、日本スポーツ振興センターは、このうち「アスリート支援」を受託した。フェンシング・男子フルーレは、2009 年、国により、ロンドンオリンピックでのメダル獲得の可能性が高いターゲット競技種目に選定され、それを受けて JISS では、2009 年 4 月から 2012 年ロンドンオリンピックまでの期間、ターゲット競技種目であるフェンシング男子フルーレナショナルチームに対して 7 つの分野から包括的にサポートを行った。

（公社）日本フェンシング協会（以下協会）がロンドンオリンピックにむけた強化方針で掲げた目標は、フルーレ、エペ、サーブルで合計 5 個のメダル獲得¹²⁾であり、男子フルーレ種目では個人と団体の 2 つのメダル獲得が目標であった。

チーム「ニッポン」マルチサポート事業におけるフェンシング男子フルーレナショナルチームサポートは、ロンドンオリンピックでの個人と団体のメダル獲得を目標に、協会の強化担当者の強化プランに沿い、多分野から包括的にサポートすることを趣旨に行われた。

本稿では、チーム「ニッポン」マルチサポート事業の「アスリート支援」で実施されたフェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポートの体制、サポート内容、協会からのヒアリング結果等について報告する。なお、本稿はサポートの全体像を報告するものであり、各分野のサポート内容の詳細は別稿にて報告する^{1,4,5,7,8,9)}。

II. サポート対象

サポート対象はフェンシング男子フルーレナショナルチームであり、2012 年 5 月まではナショナルチーム全員を、6 月以降はロンドンオリンピックにエントリーする選手をサポート対象とした。対象となった選手数は、2009 年が 5 名、2010 年 1 月から 2011 年 12 月が 6 名、2012 年 1 月から 5 月ま

だが7名、2012年6月からロンドンオリンピックまでが4名であった。サポート対象選手は、2009年度のナショナルチーム選手5名に、2010年1月に1名が、2012年1月にさらにもう1名が新たに加わる形で7名へと増加し、2012年5月25日、この7名の中からロンドンオリンピックにエントリーする4選手が選出された。ロンドンオリンピックでは、団体戦に4名全員が、個人戦に4名のうちの3名が出場した。

Ⅲ. フェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポート体制

フェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポート体制は、JISS マネージメント担当者と各サポート分野の担当者（以下各分野のサポート担当者）で構成された(図1、以下 JISS スタッフ)。サポート分野はトレーニング指導、フィットネス（フィットネスチェックとコンディションチェック）、医学（リハビリテーション）、栄養、心理、映像、情報戦略であり、それぞれの分野でサポート担当者が配置された。

Ⅳ. サポート内容の整え方

2009年からロンドンオリンピックまでの約3年半、サポート内容は、下記の流れで整えた。

- ①2008年北京オリンピックの際にチームの評価が高かったサポート、2009年以降も必要なサポートは継続する
- ②3年半の初期の段階で新たなサポートを JISS スタッフから提案・導入する
- ③3年半の中期から後期に①②のサポート内容を精査する
- ④ロンドンオリンピックでは③で精査されたサポートを実施する

①に関して、北京オリンピック前から行われていたのは、トレーニング指導、心理サポート、映

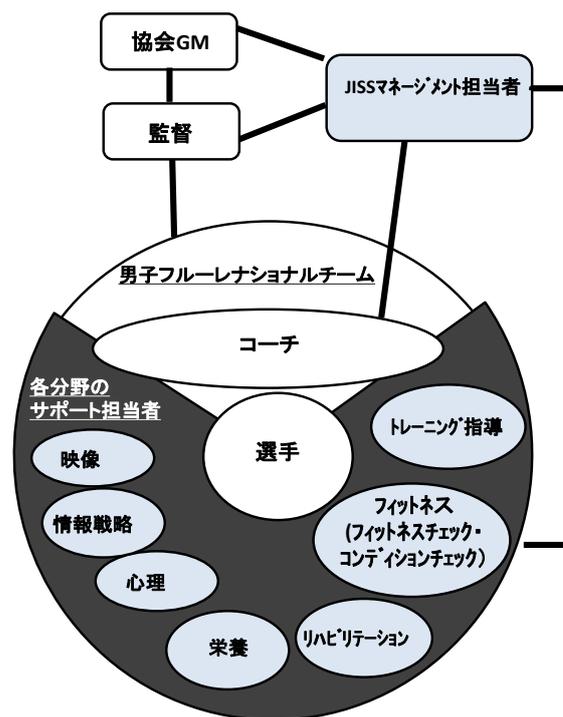


Figure 1. The system for supporting Japan fencing men's foil national team.

像サポート、フィットネス（フィットネスチェック）であった。これらの分野のサポートは協会・チームの評価が高く、ロンドンオリンピックまで継続してほしいとの要望があり、継続されることとなった。

②に関して、新たに JISS スタッフから提案・導入された分野は、医学（リハビリテーション）、栄養、情報戦略、フィットネス（コンディションチェック）であった。3年半を一つの時間の流れとしてとらえたとき、オリンピックに近い時期に新たなサポートを導入すると、失敗やチームの混乱を招くリスクがあるため、新たなサポートはなるべく初期に導入し、検討、精査しながらオリンピックに向かうという考えから、コンディションチェック以外のサポートは 2009 年度に提案・導入された。導入は、味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）での練習時のほか、国内合宿、世界選手権、アジア選手権でのサポートを通して行った。

③と④については、本稿で後述する。

V. サポート案の作成と計画・実行

サポートは、チームの強化方針、スケジュールに沿って行われる。そのため、JISS スタッフはこれらを理解する必要があった。逆に、チーム・選手の課題に JISS スタッフが気づき、それを克服するためのサポートを提案できるときは、JISS スタッフからチームにそれを伝え、そのサポートを取り入れるかどうかをチームに検討してもらう必要があった。

サポート案・計画に関するミーティングには2種類あり、それぞれ「カンファレンス」、「フェンシングサポートミーティング」と呼ばれていた(図2)。

「カンファレンス」では、協会のゼネラルマネージャー(以下協会GM)、ナショナルチーム監督(以下監督)、男子フルレチームのコーチ(以下コーチ)と、JISS マネージメント担当者が会した。協会GM、監督、コーチから JISS マネージメント担当者へはチームの強化方針、スケジュール、チームが要望するサポートの内容が伝えられ、JISS マネージメント担当者からは JISS スタッフがサポートの場で抽出した課題を説明、改善のためのサポートの提案を行った。そしてチームから要望されたサポートと JISS スタッフから提案したサポートをあわせて検討し、いつ、どのようなサポートを行うかという計画をたてた。このように、「カンファレンス」とよばれたミーティングは、チームの強化方針、スケジュール、チームの課題にあわせてサポート計画をたてる場という役割があった。このミーティングは年3-4回の頻度で実施された。そのうち2010年の8月には協会GMの提案で、2010年12月と2011年11月にはコーチの提案で協会GM、コーチ、各分野のサポート担当者も含めた JISS スタッフが集まり、ミーティングを行った。

「フェンシングサポートミーティング」は JISS スタッフ(JISS マネージメント担当者と各分野サポート担当者)が会して行われた。そこでは、(1)カンファレンスで作成されたサポート案を実行に移すための内容(計画)、(2)サポートの進捗状況確

認と情報共有、(3)サポート中に気づいたチームの課題と、その克服にむけてカンファレンスへ提案するサポートがあるかについて話し合われた。

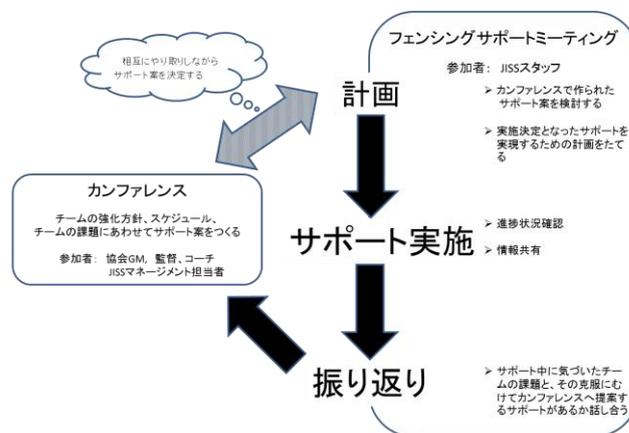


Figure 2. Two meetings for supporting men's foil team.

VI. サポート内容の精査

マルチサポート事業が行われている3年半、選手は成長・変化し、それとともに必要となるサポートも変化する。実施しているサポートの中で、選手の成長・変化とともに必要性が低くなったサポート、もともと必要性が低かったサポートは止められねばならない。サポート分野に関して必要性が低いとチームが評価したものはなかった。「IV. サポート内容の整え方」の①と②で2008年より継続、2009年と2010年に新たに導入となったサポート分野は、全てロンドンオリンピックまでサポートを行った。その一方、選手の状態の変化やオリンピック会場の環境が明確になったことで、それぞれの分野の中で、実施頻度やタイミング、内容を修正する必要はあった。例えば、選手自身でできることが増えた分野では担当者の海外遠征への帯同サポートの頻度を減らしたり、3年半の中期にはコンディションチェックを JISS での強化練習期間と海外遠征期間通して毎日行っていたが、後期には強化練習期間中の週2回の頻度へと変更したりした。

3年半の間に、チーム・選手の状態をどのように

評価しサポート内容を変えていったかについては、各分野のサポート担当者が別稿で詳細に述べている^{1,5,7,8,9)}。

Ⅶ. サポート内容とサポート実施のために 行った事柄

1. 全体の概略

フェンシング男子フルーレナショナルチームのサポートでは、トレーニング指導、医学、栄養、心理、フィットネスサポートを通じた心身のコンディショニングと、映像（試合映像分析）、情報戦略サポートを通じた強豪国対策、ロンドン市内でのオリンピック準備等に関するサポート等を行った。

また、JISS スタッフはオリンピックの試合エリアや選手村に入れられない可能性が高かったことから、これらの場所で選手が自分で行わねばならないウォームアップや栄養・水分補給、セルフケアなどを選手自身でできるようになるためのサポートを加えることをJISS スタッフから提案し、サポートに加えた。

2. 各分野のサポート内容

各分野のサポート内容の概略を下記に示す。詳細は別稿で報告している。

・トレーニング指導

基礎体力の向上および大会に向けたコンディショニングを中心に、コーチと相談しながら年間を通して計画的に指導した⁹⁾。

・医学（リハビリテーション）サポート

JISS 内では選手のコンディショニング管理と怪我をしている選手のリハビリテーションの指導、怪我を予防するための運動指導やセルフケアの指導も行った。大会前合宿では大会にピークをもっていくためのコンディショニング管理、大会時には試合後のリハビリサポートと怪我をした選手の応急処

置も加えて行った⁵⁾。

・栄養サポート

トレーニング期は選手のからだ作り、コンディショニング管理、疲労回復、試合期はエネルギー源の確保、水分補給、疲労からの早期回復を主な目的に、食事、補食、水分のとりかたについてアドバイスを行った⁷⁾。

・心理サポート

各選手の心理的課題に対するサポートを、守秘された場所における個別面談形式で行った⁸⁾。

・フィットネスサポート

A) コンディショニングチェック

トレーニングおよびリカバリー計画立案に繋げることを目的に、起床時心拍数、体重、自覚的疲労度、筋痛、尿検査（蛋白、潜血、pH、クレアチニン、白血球、尿比重）のデータ¹¹⁾、コーチとJISS サポート担当者の所感を記載したシートを作成し、コーチやサポートスタッフへフィードバックを行った。

B) フィットネスチェック

2009年から2011年の間に8回、身体組成、筋断面積、筋力、瞬発的運動能力、有酸素性運動能力、敏捷性（動作反応時間、ステップング）などについてのチェックを行った⁴⁾。

・映像サポート

試合および練習映像をデータベース化し、要望に応じて編集・加工、分析を行った。そして、映像と分析データを必要なときに取得できるよう環境を整えた¹⁾。

・情報戦略サポート

大会情報の収集、ロンドンオリンピックおよび世界選手権の現地での事前準備と各種調整、強豪国の選手情報の収集を行った。

上記に加え、JISS 内科医師もJISS クリニックで

の診療や海外遠征への帯同で、疾患の治療や薬の処方を行うことを通して、選手のコンディションを良い状態に保つようサポートした。

3. 複数分野の連携

7分野がサポートに携わることによって、同じ課題に複数の分野が取り組むケースができた。同じ課題に対して複数の分野が関わる際には、サポートの方向性が同じほうが効果が高まるであろうという考えのもと、各分野のサポート担当者が連携をとりながらサポートを行った。

4. 多分野の連携にあたっての共通の考え方

フェンシング男子フルレナショナルチームサポートは“NTC/JISS、合宿でのサポート”と“大会でのサポート”に大別される。トレーニング指導、医学、栄養、心理、コンディションチェックという心身のコンディショニングに関するサポートでは、“大会に向けての強化が良い形で進むことが重要であり、そこで作った良い状態を大会に持ち込む”という考えがベースにあった。よってこれらの分野では、“NTC/JISS、合宿でのサポート”の流れをくみ、必要に応じて大会のための内容を加え、“大会でのサポート”が行われた。

例えば栄養サポートでは、“NTC/JISS、合宿”でトレーニングの目的、強度、量に合わせた食事摂取方法と体重管理に関する個別サポートを行い、その流れをくむ形で、“大会”が行われる海外でも、日本とは異なる食環境の中で、選手自身がコンディションと練習量に合った食事を選択し体重管理できるようになるためのサポートを行った。そして大会当日には、大会に特化した内容として、1日6試合を戦い抜くための適切な補食、水分摂取方法についてのアドバイスが加えられた⁷⁾。

5. JISS スタッフ間の連携と情報共有

複数の分野が連携を保ちながらサポートを行うためには、①“チームの強化がどのような方針・スケジュールで行われるか”を全員が理解すること、②選手の課題・状態について共通の理解があること、この2つが重要であった。

JISS のフェンシングサポート担当者間の連携・情報共有には上述のフェンシングサポートミーティングとコンディションチェックデータを利用した。コンディションチェックデータは、起床時心拍数、体重等のデータのほか、コーチとトレーニング指導・医学・栄養のサポート担当者の所感が記載され、コンディションチェックが実施された日の午前中に、コンディションチェックデータに携わった担当者、フェンシング選手担当の JISS 内科医師、マネジメント担当者にメールで回付された。選手の状態の確認と、トレーニング・練習のスケジュール・強度の確認、サポートのイメージの共有が必要なときには、トレーニング指導・医学・栄養・コンディションチェック担当者達だけでミーティングを行った。

そのほか練習場や JISS 内で会った時にも各分野のサポート担当者間で情報交換を行った。このように、ミーティングでたてたサポートの計画を実行するにあたって、各分野のサポート担当者が情報共有しながらそれぞれのサポート内容の調整を行った。

6. 多分野が連携して行ったサポート例

“NTC/JISS、合宿でのサポート”

- ・トレーニングで筋量や瞬発的運動能力を向上させる時期の栄養アドバイス
- ・トレーニングとフェンシング練習の強度・ボリュームに応じて、医学サポートではリハビリとケアのサポート内容を調整、栄養サポートでは食事に関するアドバイスをを行い、選手の回復を助けたこと
- ・フェンシングの練習は協会のコーチが、トレーニングは JISS スタッフがそれぞれ指導しており選手の一日の活動の総量は見えづらい。活動の総量が多い日が続いて選手のからだに筋の“張り”や“痛み”が現れたときは医学サポート担当からの報告が、起床時心拍数や自覚的疲労度、尿成分に表れたときはコンディションチェックデータが、トレーニング指導担当者にそれを知らせる手がかりとなり、トレーニング量が調整

されたこと

- ・リハビリテーションから強化のためのトレーニングへ移行するときのトレーニング内容の調整
- ・リハビリテーション期間中およびリハビリテーションから強化のためのトレーニングに移行する時期の体重管理のための栄養アドバイス
- ・体重管理がうまくいかないことが心の状態から来ていたケース
- ・適切なトレーニングを行っても効果がうまく得られないことが疾患からきていたケース

“大会でのサポート”

- ・ロンドンおよび世界選手権開催地の事前調査で情報戦略担当者が大会会場や練習会場、食・住環境に関する調査を行い、チームと全分野のサポート担当者に情報を提供したこと
- ・個人戦の翌日あるいは2-3日後に団体戦が行われる国際大会において、個人戦終了後の早期回復を医学サポートと栄養サポートの両方でサポートしたこと

7. サポート実施のために行った事柄—各所の連携と情報共有—

A. (公社) 日本フェンシング協会との連携

国際大会でのサポートを行うに当たり、(公社) 日本フェンシング協会の協力が必要なことは数多くあった。たとえば世界選手権、アジア選手権などでは、競技エリアに入るために、大会の組織委員会から AD カードを発行してもらわねばならない。またリカバリーや身体のケアのためのサポート、食事についてのアドバイス、心理の個別セッション等でチームと同じ場所に宿泊するために、選手団の一員として大会組織委員会へ宿泊を申し込まねばならないこともあった。このようなケースでは、協会が選手団と一緒に JISS スタッフの AD カードや宿泊の申請を行い、サポートがスムーズにゆくよう手配してくれた。試合映像撮影に関して、大会組織委員会が契約しているメディアとの関係で撮影許可証の手配が難しかった際、協会が公式の依頼文書を作成、それを国際フェンシング連

盟へ送付したことによって、大会組織委員会から特別に撮影許可証が発行されたこともあった。

B. サポート実施に向けての JISS 内の調整

JISS のマルチサポート事業スタッフは、種目担当で雇用されている者以外は各専門分野で雇用されており特定の競技の専任ではない。よって国際的な総合大会でのサポート業務や他競技のためのサポート業務との調整が必要となる。フェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポートでも 2011 年までに 3 大会、帯同サポートが必要な時期に担当者を派遣できないことがあった。理由は人員不足とマネージメントの失敗であった。この件への反省から、特にマルチサポートハウス準備と多くの競技のサポートが集中するロンドンオリンピック前の 1 ヶ月半、必要なサポートが欠けないよう、JISS のいくつかの分野の責任者に人員配置の配慮を依頼した。

VII. ロンドンオリンピック

ロンドンオリンピックの際には、事前準備として、情報戦略サポート担当者が練習環境整備と、協会・各分野のサポート担当者への情報提供を行い、他の分野のサポート担当者達は男子フルーレナショナルチームと一緒に、あるいはマルチサポートハウス担当スタッフとして別途、ロンドン入りした。ロンドン市内でのサポートは、マルチサポートハウスと協会が用意した練習場の 2 か所で、トレーニング指導、医学（リハビリテーション）、栄養、心理、映像サポートを、男子フルーレナショナルチームの要望とスケジュールに合わせて実施した。「サポート体制・サポート内容の整え方④」で述べたように、各分野のサポート内容は、それまでの国際大会でシミュレーションを実施した内容を実施し^{1,5,7,8,9)}、ロンドンオリンピックでのみ実施する特別な内容は加えなかった。

Ⅷ. (公社)日本フェンシング協会からの
ヒアリング

ロンドンオリンピック後、協会GM、コーチ 3 名、選手 6 名の計 10 名に対しヒアリングを実施した。概略を表 1 に示した。ヒアリングでは、フェンシング競技と各選手の特徴にあわせて各分野が専門的なサポートを行ったことについての評価が高かった。また、3 年半の初期と中期にうまくいかなかったことについても、後期に改善できていたとのことであった。

Ⅸ. 総括

表 1 をふまえて総括すると、ロンドンオリンピックでのメダル獲得を目標に、コーチの強化プランに沿ってサポートを行い、チームがロンドンオ

リンピックの団体戦で銀メダルを獲得したこと、本サポートに対して協会 GM、コーチ、選手から上記のような評価を得られたことは、本サポートに至らない点がありつつも、ある程度その遂行がうまくいったといえよう。しかし表 1 にあるようにチームの要望に添えなかったこと、うまくいかなかったことがあり、その原因が JISS の人員不足や、マネージメントがうまくゆかなかったことにあったことは上述した。また、選手、コーチを含め協会も、サポート担当者との信頼関係をつくる努力をしたり、サポート活動が良い形でできるように場を整えたり、色々な事柄について折り合いをつけた。これらはサポートの実施にあたって重要な事柄であった。

今後のフェンシング男子フルーレナショナルチームに対するサポートでは、本稿の内容が踏まえられ、サポート体制、活動方針、サポート内容が、より良いものになることを望んでいる。

全体	<ul style="list-style-type: none"> ● 各分野の担当者が、フェンシングの特徴、選手の特徴を理解して、専門的なサポートをしてくれた。 ● マルチサポート事業が開始されてから初めてのオリンピックで、JISSも試行錯誤しているのは理解している。担当者を派遣してもらえなかったり、うまくいかなかったこともあった。それも含めて全体的にどうかと考えたとき、やはり良かったと思う。 ● 選手団・マルチサポート担当者がチームとして動けたのが大きかった。専門的なサポートに加え、日本人のメンタリティとして、生活、試合、練習など長時間をともに過ごすことで一体感が生まれ、それが強さにつながる部分があって、そういう面でもよかったと思う。 ● マルチサポート事業が開始されてから、各サポート担当者と、フェンシング協会の強化スタッフ・選手との連携をつくることを互いに心がけてきて、4年間でそれがだんだんできつつあるように思う。
多分野のサポートについて	<ul style="list-style-type: none"> ● マルチサポートができて、トレーニング、栄養、試合に向けてのコンディションの作り方など、いろんなことを総合的に、客観的に考えられるようになった。 ● サポートを受けているうちに“こうするべき”というふうな意識が高くなっていき、それがメダルにもつながっていったのではないと思う。 ● (「練習場や大会会場でサポート担当者が多いことが気にならなかったか」との問いに) ● (2012年1月から遠征に帯同する分野が絞られたこともあり、思わなかった。 ● いろんな分野のスタッフが練習場に来てくれて、尋ねたいことをすくりに尋ねることができ、怪我など緊急時も対応してもらえる環境はよかった。 ● 国際線での移動を一緒に行うとスムーズにいかない場合もあるので、移動は配慮してもらえるとありがたい。
JISSから幾つかのサポートを提案したこと、その後の精査について	<ul style="list-style-type: none"> ● サポートしてもらって初めて、どんなサポートが分かった部分があったので、競技団体からの要望に基づいたのではなく、JISSから提案してもらった形はあっていいと思う。 ● 最初はサポートを提案してもらってたくさん受けていたが、だんだん必要性の高いものと、それほど高いものが判断できるようになり、最後は残るべきものが残ったと思う。 ● サポートを受けている中で、だんだん自分でできるようになっていったもの、それほど必要性が高くなかったものについて、“この部分はもう大丈夫”と担当者に伝えるには信頼関係が必要で、それができる信頼関係をつくるよう互いに努力し続けることが大切だと思う。 ● いろんな競技のマルチサポートについて情報交換する会が半年に一度ぐらいの頻度であれば、他の競技で行われているサポートで役立ちそうなものを取り入れやすくなると思う。
ウォーミングアップ、栄養・水分補給、セルフケアなどオリンピック会場や選手村で行うことを、自分自身でできるようになるためのサポート	<ul style="list-style-type: none"> ● ありがたかった。指導してもらった事柄は、ずいぶんできるようになったと思う。 ● それまで漠然と行っていたものが、どうすればよいか理解できるようになり、それができてから試合の動きが良くなったり、(一日に何試合も行うが) 夕刻の試合でも脚が壊れたりしなくなった。 ● マルチサポート事業のスタッフも、ADの関係で選手村や大会会場に入れないなど、どうにもできない事柄がある。できること、できないことをよく把握した上で、今後もサポートを頼むようにしたい。
今後に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ● 次のオリンピックまで4年という限られた期間しかない。サポート担当者が変わると、フェンシングの特徴と、競技力向上に必要な事柄を理解してもらうところから始めねばならない。同じ担当者でサポートを継続してほしい。 ● 2010年度の途中までは、各分野のサポートについて報告を書面でもらっていたが、それ以降、書面での報告がなくなり、サポートを受けている男子フルーレチーム以外はサポート内容が見えづらくなった。サポートの内容は書類として報告したり残したりするようにしたい。

Table 1. Outline of the hearing contents from FEDERATION JAPONAISE D'ESCRIME.

VI. 参考・引用文献

- 1) 千葉洋平, 白井克佳. フェンシング男子フルーレナショナルチームのロンドンオリンピックに向けた映像サポート. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 2) 独立行政法人 日本スポーツ振興センター 国立スポーツ科学センター. 文部科学省委託事業 チーム「ニッポン」マルチサポート事業 (平成 20 年度) 報告書 第 30 回オリンピック競技大会 (2012/ロンドン) に向けたサポート戦略構想. 第 2 部マルチ・サポート事業とその現状分析. 1.マルチサポート事業の経緯. 独立行政法人 日本スポーツ振興センター 国立スポーツ科学センター, 東京, 2009, 18-20.
- 3) 自由民主党政務調査会、スポーツ立国調査会. 『スポーツ立国』ニッポンを目指して ～国家戦略としてのスポーツ～. 自由民主党政務調査会, 2008.
- 4) 星川雅子, 岡野憲一, 林川晴俊. チーム『ニッポン』マルチサポート事業におけるフェンシング男子フルーレナショナルチームに対するフィットネスチェック. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 5) 栗田英行. フェンシング男子フルーレナショナルチームへのトレーナーサポート. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 6) 文部科学省. チーム「ニッポン」マルチサポート事業戦略. 文部科学省公式サイト.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/07/attach/1295999.htm
- 7) 長坂聡子. フェンシング男子フルーレナショナルチームの栄養サポートについて. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 8) 織田憲嗣、宇土昌志. ロンドンオリンピックへ向けた心理サポートの取り組み ～フェンシング男子フルーレナショナルチームを対象として～. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 9) 岡野憲一、田村尚之. ロンドンオリンピックへ向けたフェンシング男子フルーレナショナルチームに対する体力トレーニングサポート. *Jpn. J. Elite Sports Support.*
- 10) 小野清子. (編) 体育施設出版, 国立スポーツ科学センター 10 年のあゆみ ～挑戦への新しいカタチ～, JISS 10 周年にあたって. 独立行政法人 日本スポーツ振興センター 国立スポーツ科学センター, 東京, 2011 年, 3.
- 11) 杉田正明, 早川直樹. (編) 戸川晴彦, 池田誠剛, サッカーのコンディショニング, 高地トレーニングのコンディショニング — 2010FIFA ワールドカップ南アフリカ大会における取り組みから—, 大修館書店, 東京, 2010, 143-148.
- 12) (社) 日本フェンシング協会総務委員会広報部会. ロンドン・オリンピック大会にむけた強化方針について. 社団法人 日本フェンシング協会 公式サイト
http://fencers.web.fc2.com/files/20110116_LOG.pdf

Abstract

Supporting Japan fencing men's foil national team in Team 「NIPPON」 Multi Support Project for London Olympic Games

We, JISS and team 「NIPPON」 multi-support project staffs, carried out comprehensive support from the many fields to support performance improvements of Japan fencing men's foil national team. The comprehensive support included training, medical, nutritional, psychological supports, match analysis, and information strategy supports. Here we report some examples of our support.

Key words: Fencing, Men's Foil national team, Team 「NIPPON」 Multi Support Project